

演繹

きらびやかな街を歩いているような気もするが
それにしては危険な匂いがまったくしない
紙芝居のような現実

意思などとは関係なく刺激を与える小さな画面
そこには厭世的な思想は存在することは不可能であって
そもそも厭うべき世界そのものが無関係である

友人から聞いたことがある

「手首を切って覗いてみたことがある。
けれど、無というものは存在しなかった。」と

預言者は言う

「己ひとりだけが滅亡しても無駄である。
世界そのものが滅びる必要がある。」

透明なペットボトルを蹴りながら
空疎な死というものについて想像をしてみる
それに至るまでの不安というものについても

じりじりと照りつける太陽光は
暴力的というよりも病的な表情で
有り余るほどのエネルギーを浪費している

覚醒と睡眠の繰り返しの中で
また、切れ目のない時間の中で
現れては消滅する感情という泡

雑踏に紛れ込みながら私は探してみた

我、というものを
ああ、ひたすら探してみたのだ

風はひんやりとした東風に変わっている
あらゆる歴史的な苦悩に向けて
目に見えぬ塵を運び、静かに降下させる

遠い雲が光をやわらげてゆく
黄昏とともに、安逸と不安の混濁液が
我々の血管を満たし、細胞へと浸透してゆく

何も行う必要はない、という声がする
我々が導くままに従えばよい、という声がする
我、などというものは忘れよ、という声が

(2011.7.21)